

古代日本史を賑わす七つの話題

はじめに

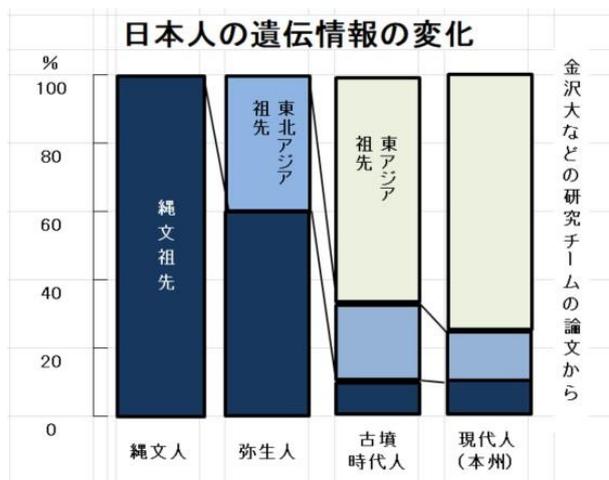
日本人のルーツは何処からか？とか、邪馬台国は何処なのか？など日本の古代について DNA 解析や遺跡の発掘などによる新しい発見が続き、私も驚いたり楽しんだりしています。そこで、私なりに古代日本史を賑わす話題から七つを取り上げてみました。

① 日本人のルーツ探し

日本人は縄文人と弥生人の混血で形成されているという考え方が主流でしたが、最近日本人のルーツについて DNA 解析による新しい考え方が提案されています。

その1つは金沢大や鳥取大などの国際研究チームが金沢市で見つかった約1500年前の古墳時代の人骨の DNA 解析から、縄文人や弥生人の他に古墳時代（6世紀頃）になって大陸や朝鮮半島から戦乱を避けて日本にやってきた古墳人が登場します。

研究チームは、約9千年前の縄文人や約1500年前の古墳人など計12体の DNA を解読し、すでに解読済みの弥生人2体のデータなどと比較した結果、弥生人は、中国東北部の遼河流域など北東アジアで多く見られる遺伝的な特徴を持ち、縄文人と混血していることも確認できた。一方、古墳人は、弥生人が持っていない東アジア人に多く見られる特徴を持っていた。さらに、現代日本人と遺伝的な特徴がほぼ一致することも判明したというものです。



2つ目は理化学研究所の寺尾知可史チームリーダーらが3000人以上の日本人のゲノムデータを解析しました。

その結果、日本人の集団は現代の沖縄、東北、関西の人々に比較的多く受け継がれている

と仮定するとうまく説明できることが分かった。今回の研究成果の「3つの祖先系統」が縄文人や弥生人などと直接一致するわけではないが「二重構造モデルでは説明が難しい」と理研の寺尾氏は指摘しているそうです。

② 縄文時代が変わった

縄文時代は、以前は狩猟・採取生活のやや未開の生活がイメージされていましたが、青森の三内丸山遺跡の発掘調査などの成果によりずっと現代に近い生活をしていたことが判り、今から13000年くらい前から2300年くらい前までの約1万年間、平和な生活を営んでいたと考えられています。



三内丸山遺跡では、平成4年（1992年）から始まった発掘調査で、縄文時代前期～中期の大規模な集落跡が見つかりました。たくさんの竪穴建物跡や掘立柱建物跡、盛土、大人や子供の墓などのほか、多量の土器や石器、貴重な木製品、骨角製品などが出土しました。更に調査が進み、令和3年（2021年）には三内丸山遺跡を含む「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録されました。

縄文時代の人々は、移動手段が徒歩か舟しかないにも関わらず、遠くまで往来していたようです。黒曜石はときには海を越えて運ばれていて、信州産黒曜石が北海道でも見つっていますが、北海道産の黒曜石も本州まで運ばれています。九州の黒曜石は朝鮮半島や南西諸島へと運ばれています。また、茅野市内の遺跡からは、新潟県と富山県の県境に産地があるヒスイや千葉県の手子に産地があったコハクが出土し、各地の間で交流が行われていたことが明らかになっています。

稲作が始まったのは弥生時代の初め、紀元前4～5世紀と推定されていましたが平成1

5年の国立歴史民俗博物館の報告によると、弥生時代の土器に付着している「ふきこぼれ」を測定したところ、考えられていたよりも500年も時代を遡るという結果が出たということです。稲作が紀元前10世紀ごろに始まったということになり、この時代は縄文時代晩期になります。

更に岡山県灘崎町にある彦崎貝塚の縄文時代前期（約6000年前）の地層から、稲のプラントオパール（イネ科植物の葉などの細胞成分）が大量に見つかり、稲の栽培が始まったとされている縄文時代後期（約4000年前）をはるかにさかのぼる可能性があると言われています。

③ 出雲族の歴史

平成12年から13年にかけて、出雲大社境内遺跡からスギの大木3本を1組にし、直径が約3mにもなる巨大な柱が3カ所で発見されました。これは、古くから宇豆柱（うづばしら）と呼ばれてきたもので、境内地下を流れる豊富な地下水のおかげで奇跡的に当時の姿をとどめて出土しました。

柱穴は直径が最大で約6mもあり、柱の配置や構造は、出雲大社宮司の千家国造家（こくそうけ）に伝わる巨大な本殿の設計図とされる「金輪御造営差図」（かなわのごぞうえいさしず）に描かれたものと類似していました。この柱は鎌倉時代前半の宝治2年（1248年）に造営された本殿を支えていた柱であると考えられます。

昭和58年（1983年）、島根県斐川町神庭西谷周辺の「荒神谷遺跡（こうじんだにいせき）」で道路工事に伴う発掘調査を行っていた時、偶然、銅剣358本が発掘されました。それまで全国で出土した銅剣の総数は約300本、荒神谷遺跡はそれを一ヶ所で上回る出土数で、当時の日本古代史学・考古学界を大きく揺るがす大発見となりました。さらに翌年にはその近くで銅鐸6個、銅矛16本という大量の青銅器が出土。これらは「島根県荒神谷遺跡出土品」として国宝に指定されています。

出雲大社の宇豆柱や荒神谷遺跡の青銅器の発見から、出雲の国譲りの物語についての裏付けが明らかになってきました。



④ 淡路島は日本のはじまり

淡路島は日本で最古の歴史書「古事記」の冒頭を飾る国生み神話で、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）・伊弉冉尊（いざなみのみこと）が天沼矛（あめのぬぼこ）で下界をかき回し、矛先から滴り落ちた塩の雫が固まって「おのころ島」ができた島として記されています。淡路島のすぐ南の鳴門海峡では世界最大級の渦が巻き、島の内外には絵島や沼島、自凝島（おのころじま）神社などおのころ島の伝承地がいくつも点在します。

平成27年（2015年）4月、淡路島の南あわじ市にある松帆地区で古式の青銅器である21個の銅鐸と14本の銅剣が発見されました。銅鐸は2100年～2300年前に埋められたことがわかっており、一緒に出土した舌（ぜつ）によって金属性の爽やかな美しい音を立てます。播磨灘を臨む海岸地帯を神聖な場所として埋納した祭祀のあり方は、島と海を舞台に活躍した海の民が携わったことを想像させます。



淡路島の中部地区にある五斗長垣内（ごっさかいと）遺跡から23棟の竪穴建物跡が見つかり、その内の12棟が鉄器づくりを行っていた鍛冶工房であったことがわかり平成24年に国史跡に指定されました。弥生時代の1世紀に鉄器の生産を開始し、100年以上継続した鍛冶工房の跡や朝鮮半島からもたらされた鉄斧などが出土し、海の民の手によって、金属器とともに先端の技術と文化が伝えられたとされました。淡路島が鉄器生産の拠点だったことと国生み神話で最初に生み出されたことと関係があるのかも知れません。

また、洲本市の二ツ石戎ノ前遺跡では、辰砂を原料とする朱の精製を行った工房跡も発見されています。これらの遺跡は邪馬台国の女王・卑弥呼が登場する直前の時代のもので、海の民が生産した鉄や朱は、後に大王が求めた重要な物資でもあり、「倭国大乱」の謎を解くカギともされています。

⑤ 富雄丸山古墳

令和5年（2023年）、富雄丸山（とみおまるやま）古墳から盾の形をした銅鏡と鉄剣が出土しました。富雄丸山古墳は奈良市丸山にある全国で最大規模の円墳で、4世紀後半（古墳時代前期後半）頃の築造と推定されます。

古墳の墳頂部は盗掘されており、被葬者の確定はできませんが、今回銅鏡や鉄剣が出土した造出部は木棺もいい状態で保存されており、竪櫛も出土したことから女性が埋葬されていたと推定されています。

盾形銅鏡の表面は研磨され、裏には全体に神像や霊獣をあしらった円形の文様が施され、盾形の銅鏡の出土は初めてであり、鏡面の面積はこれまでに出土した古代の銅鏡では最大だといわれています。

鉄剣は幅6センチの剣身が蛇のように曲がりくねる「蛇行剣」で、長さ2.37メートルは国内最大で、これまでに全国の古墳などから出土した約80本の蛇行剣のなかで最古とみられています。銅鏡と鉄剣ともにこれまで出土例がない古墳時代の金属工芸の最高傑作で、国宝級の大発見だそうです。



「富雄」の地名は「登美」から転じたといわれており、「日本書紀」によると、神武天皇は日本全土を治める都を探して九州から東に向かい、河内から大和に入ろうとした時、登美の地を本拠に大和を支配していた長髓彦が神武軍の大和への侵入を阻みます。神武軍は熊野から迂回する戦術に切り換えて進軍し、大和を守っていた長髓彦の妹の夫であり上司である饒速日命（ニギハヤヒ）が迎え撃ちますが、二人が同じ天孫族であることを確認して神武は大和の地へ入り初代の天皇になります。

富雄丸山古墳は円墳であり天皇を埋葬した前方後方墳ではないため、長髓彦または饒速日命の一族、あるいはその末裔とされる物部氏にかかわりのある墓ではないかなどと被葬者が誰であったのかはますます興味をひく話題になっています。

⑥ 邪馬台国論争のその後

日本古代史最大のミステリー、邪馬台国はどこにあったのか? 「近畿説」や「九州説」など論争が続く中、佐賀・吉野ヶ里遺跡で進められた発掘調査から、新たな“謎”が浮かび上がってきました。

令和4年(2022年)吉野ヶ里遺跡の「謎のエリア」と呼ばれてきた神社エリアが移転したことで初めて調査できることになり、弥生時代後期の有力者のものとみられる石棺墓のフタが外されました。土に付着していた赤の顔料や墓のフタにつけられた無数の線に研究者たちが迫りました。残念ながら石棺の中には「シャーマン」の遺体はありませんでしたが、まだまだ新しい発見はありそうです。

一方、邪馬台国「大和説」では纏向遺跡の研究が進んでいます。弥生時代終末期、3世紀に入ると三輪山のふもとに、都市が建設されました。「女王が都とした邪馬台国」ではなにかと言われる纏向遺跡です。この近傍で3世紀の中頃に突然、巨大な前方後円墳である箸墓古墳が出現します。箸墓以前の最大級墳墓である「纏向石塚古墳」が長さ90mであるのに対して箸墓古墳は280mで、その後350年にわたって大王墳の標準的な大きさになりました。

古墳の造成に動員された労働力は、纏向石塚古墳が4万5千人に対して箸墓古墳は135万人で30倍の規模で、邪馬台国の女王の墓にふさわしい古墳です。出土した土器を炭素14年代法で調べたところ、箸墓古墳がつくられたのは西暦240年～260年で、女王卑弥呼が没したのは248年頃とまさにピッタリと符合し、邪馬台国大和説を強化しています。



⑦ 古代山城

7世紀に入ると東アジア情勢が緊迫し、流動化します。新羅は唐と同盟を結び、斉明6年(660年)百済を挟撃しこれを滅ぼしました。倭国は百済復興運動を支援して出兵しましたが、天智2年(663)の白村江の戦いで大敗し半島から撤退します。天智天皇は

強大な唐の陸海軍が百済征服の余勢を駆って日本へ来襲する危険を考えて急遽、防備の態勢を整えました。

天智3年には対馬・壱岐・筑紫に防人と烽を設置し、筑紫に水城（現在の福岡県太宰府市）が築造され、翌年には百済からの亡命貴族の指導で、長門の城、筑紫の大野城、椽城（基肆城）が築城され、さらに天智6年には、対馬の金田城を最前線として畿内に最後の砦の高安城が控えるというように、九州から畿内までの防衛ラインを構築しました。

令和5年（2023年）3月、岡山の「芋原の大すき跡」が古代山城と確認され、「続日本紀」に記載された「備後国の茨城」である可能性が極めて高いとされました。また、令和6年には広島県安芸で未知の古代山城「長者山城」（仮称）が発見されました。長者山城の新発見は安芸国の成り立ちに関わる重要な遺構だと評価されています。

最近では「城ガール」と呼ばれる人たちも増え、戦国時代の城だけでなく古代山城にも興味を持つ人たちが増えて、古代山城についての話題が増える可能性があります。



おわりに

古代史を知るうえで「古事記」や「日本書紀」は重要な資料になりますが、以前はその記述内容が事実に基づかない「神話」ではないかという疑いが提起されていました。

それを覆す大発見があり、それが「太安萬侶の墓」の発見でした。昭和54年（1979年）、奈良市北部で茶畑の開墾中に偶然に発見された墓室の中から遺骨や真珠とともに銅版製の墓誌が見つかり、墓誌には日本書紀と並ぶ最古の歴史書である「古事記」の編纂者太安萬侶の名前が刻まれていました。そして太安萬侶が現在のJR奈良駅付近に住み、養老7年（723年）12月15日に亡くなったことが記されていました。このことにより、

太安萬侶が実在の人物であったことが証明され、「古事記」や「日本書紀」の記述内容にリアリティが増しています。

これからも新たな発見により、日本の古代史が明らかにされることになるでしょう。